国語（その一）

第一問　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

人間の知識について再考するときの私の出発点は、我々は語ることができることより多くのことを知ることができる、という事実である。

（注）マイケル・ポランニーは「暗黙知」という言葉とともに登場することが多い。有名な言葉に、

がある。これはまさにその通りなのだが、私が注目したいのはここではない。彼の提案した「近接項」、「遠隔項」という区別だ。

私たちは世界からさまざまな情報を受け取る。これらは近接項と呼ばれる。つまり自分が実際に体感できる情報である。こうした情報を受け取ることで、私たちは頭の中でいろいろな推論を重ね、内部モデルを作り出す。一方、世界の側ではそれを生み出す原因系が存在する。これが遠隔項である。そして近接項から生み出された内部モデルを遠隔項と結びつけたときに真正の理解が生み出されるという。

ポランニーの用いた盲人の杖（白杖）を例にとり、このことを説明してみよう。杖が何かに当たったときに私たちが感じるのは、杖を握る手の表面上の刺激である。しかし杖を使い慣れた人たちは、そのときに「手に何かを感じた」と思うわけではなく、杖の先にある障害物を感知する。このとき、手の表面上の刺激は近接項、杖の先の物体は遠隔項となる。前述した用語法からすれば、近接項は兆しであり、遠隔項という原因系が発する兆しということになる。ポランニーによれば、包括的理解はこの2つの項の結びつき＝プロジェクションが生まれたときに生じるという。

そして[A]包括的理解がなされたときには、近接項は暗黙化される。つまり意識の上にそれがのぼらなくなる。暗黙化された知識は自分の身体の一部と同じように働くという意味で身体化されたものとなり、必要な場面で、場面に応じた形でほぼ無意識的に働くようになる。

X

一方、無理に近接項に注目すると、遠隔項が知覚できなくなってしまう。杖のもたらす手のひらの感覚に注意を向けると、その感覚を与えた遠隔項は意識から遠ざかる。白杖を使った経験のある人は少ないだろうから、もう少しわかりやすい例で考えてみる。私は誤字脱字が多いのだが（変換ミスが理由であり漢字を知らないわけではないと言っ

国語（その二）

ておくことにする）、この訂正を行う時には文の意味がわからなくなることがよくある。つまり文、文章の全体ではなく、それを構成する近接項に注意を向けることで、全体を表す遠隔項が見えなくなってしまう。ポランニーはこのことを「（部分＝近接項に注意を向けると）意味はすべて、我々自身から遠くの方へと離れていくような傾向を持つ」と述べている。

このことを念頭にBスモールステップ方式の教育を考えてみよう。実は細分化された要素目標の達成は、元々の目標の達成の「兆候」、「近接項」に過ぎない。世界にはそれらを生み出す原因系＝遠隔項が存在している。遠隔項内の各要素は学習者にある種の兆しを提供するが、それらはその中の各要素の複雑な相互依存、因果関係のネットワークの産物である。これらを無視する、あるいはそれとの関係性を考えずに、兆しの習得に専心した場合には兆候が点在するだけとなり、真正の理解とはならないのだ。遠隔項の存在を知らずに近接項に特化した学習が行われる場合には、結果として形だけの結果の模倣が生み出される。これは融通の利かない、転移の可能性のないものになる。

私の研究室には、看護教育の教員、理学療法士がいるが、こういう医療系の人材養成機関ではCチェックリスト方式というのが大流行（はやり）だそうだ。つまり学習すべきことを分解し、細分化し、それを表にする。教員、学生はこれを用いることで、学習済み、経験済みのこと、これからやらねばならないことを簡単に把握できるという。その数は膨大だ。ある看護師養成機関のチェックリストを数えると、１５０を超す項目が並んでいたりする。だが、これまでのことから考えれば、こうした教育は近接項に特化されすぎて、遠隔項である患者の姿、患者の生活を不可視にしている危険性が高い。実際、臨地実習であるチェックリスト項目をクリアするために患者のところに行った学生はそれに集中し、布団がずり落ちそうになっていてもまったく気にかけないという。本書の観点から言えば、人の敷いたレールの上を、揺らぎなく、単一の方法でクリアしていくという、創発とはまるで正反対の学習が生み出されているということになる。

チェックリストなどの「きちんと教える」教育は、やっている方も受けている方もなんとなく満足する。「ここまでやった」、「ここをクリア」、「次の課題はなんだ」などという雰囲気に浸れる。しかし、これは「教育ごっこ」に陥る危険性は高いと思う。

この教育ごっこを抜け出す道はあるのだろうか。何が、兆し、近接項を超えた教育を可能にするのだろうか。単に私たちは諦め、立ち尽くすしかないのだろうか。むろん現時点でこれについての明確な解答があるわけではないが、学校とは異なる場面での教育、そこでの成長を見てみることは助けになるかもしれない。

国語（その三）

教育哲学者の生田久美子は日本の伝統芸能の技の獲得、熟達の過程を検討し、そこには学校教育とはまったく異なる原理が働いていることを指摘している。それによると、この学習の過程は、模倣、繰り返し、習熟という道筋を辿（たど）るという。そしてその道筋について、［イ］であることが特徴として挙げられている。日本舞踊でまず最初に右手をかざすという動作があるとする。これの練習を３日間、次の動作を４日間、そういうふうに進むわけではないのだ。つまり学習者＝弟子は、師匠や先輩の振る舞いの要素化されない全体を観察し、それを模倣する。そこには基礎も応用も存在しない。つまり最初から目指すものの全体像が提示され、そこに向けて練習を重ねるのだ。これは学校での学習が、なんだかわからないけど将来必要になる（はず）という形で進められるのとは対照的である。

もう一つの特徴として、ᴰ評価が不透明であることが挙げられている。師匠からのフィードバックは、多くの場合、単に「だめ（アカン）」、「良い（ウン）」という大変に不透明なものだけである。何がダメ（良い）か、なぜダメ（良い）かが指摘されることは稀（まれ）であるという。こうした不透明なフィードバックを受ける中で、学習者は何が自分の問題であり、そのためには何をなすべきかを自ら探索しなければならない。生田はこのプロセスを「学習者自らが習得のプロセスで目標を生成的に拡大し、豊かにしていき、自らが次々と生成していく目標に応じて段階を設定している」（生田久美子『「わざ」から知る』）と述べている。

弟子は師匠の作り出す世界へと潜入しようとするが、はじめはうまくいかない。そこで自分の中のリソース、状況の提供する曖昧なリソースを揺らぎながら探索し、新たな目標を生成するという創発的な学習が行われていると思われる。こうした観点からすると、大学教育でのルーブリックなどのように達成の度合いなどを細かく定義し、それをわかりやすく学習者に伝える方法は、学習者自身による目標の生成的拡大を阻害するという側面を持つということがわかるだろう。

（鈴木宏昭『私たちはどう学んでいるのか　創発から見る認知の変化』による）

（注）マイケル・ポランニー　――　ハンガリー生まれの経済学者（１８９１～１９７６年）。

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

国語（その四）

問一 傍線部**A**「包括的理解がなされたとき」とあるが、どのようなときに包括的理解がなされるのか。本文中から三十字以内で抜き出して答えなさい。

問二 **X** に入る、次の**ア**～**オ**の五つの文の正しい並べ方として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

ア つまり認識が深化していくということなのだ。

イ さらには、多くの場合、遠隔項自体も実は更なる原因系が生み出す近接項、つまり兆しである。

ウ それとともに自己は遠隔項の中に投げ出される。

エ そういう世界が多段に繰り広げられる。

オ つまりその世界の中に棲み込む（dwell in）ようになる。

① **ア→イ→エ→ウ→オ**　② **ア→エ→イ→ウ→オ**　③ **ウ→ア→エ→オ→イ**

④ **ウ→イ→ア→エ→オ**　⑤ **ウ→オ→イ→エ→ア**

問三 傍線部**B**「スモールステップ方式」とあるが、この方式のどのような点が評価されないのか。五十字以内（句読点なども字数に含む）で答えなさい。

問四 傍線部**C**「チェックリスト方式」とあるが、この方式の説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 達成感を味わうことができる反面、自分は何ができ何ができていないのかが明確に分からなくなる。

② 勉強した気になるが、何故自分はそれをやっているのかを考えずに、言われたまま行うだけになる。

③ あまりにも膨大な項目をクリアしなくてはならず、教育を受けているという気持ちになれなくなる。

④ 学習内容が細かく分かれているため、要素間のつながりが気になり、他のことが目に入らなくなる。

⑤ 自律的に目標を設定することができないので、これからやらなくてはならないことが見えなくなる。

国語（その五）

問五 空欄**イ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 非大局的　② 非効率的　③ 非分割的
④ 非即興的　⑤ 非模索的

問六 傍線部**D**「評価が不透明である」とあるが、このような評価にはどのような良い点があるのか。その説明を行った次の文の空欄に入れるのに最も適切な部分を、本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

［　　］が実現するという良い点。

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 日本の伝統芸能の技の獲得の仕方と学校での教育の仕方はまったく異なり、比べることに意味がない。

② 教師は、学習者に何が良くて何がだめであるのかを明確に伝える方法を身につけなくてはならない。

③ 世界にはそれを生み出す原因があるのだが、それよりもその原因を生み出した情報の方が重要である。

④ 部分ばかりに注意を向けていると、全体が何を意味しているのかわからなくなってしまうことがある。

⑤ 師匠と弟子の関係とは異なる、教授と学生の関係では、所詮「教育ごっこ」が行われるだけである。

国語　（その六）

第二問　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

科学論文などでよく使われるdissectという英語の動詞があります。この言葉はラテン語のdis＋secare（切り刻む）が語源となっていて、複雑な現象を「解析する」というような意味で使われます。そのままでは理解できない複雑な実体を、科学という人間が理解可能な因果性の中に取り込むために、その対象を切り刻み、単純化されたものを解析するという西洋的な思想がよく表れている言葉だと思います。それは「感じるがままに味わう」といった個人の感覚に依存した曖昧な評価ではなく、全体を切り刻み、根拠のある客観的なデータに置き換えられる形まで単純化して、論理化していく作業です。ラーメン屋も麺、スープ、チャーシュー、店の雰囲気や接客などの項目に分けて各要素を点数化すれば、Ａ全体として客観性のある点数で評価できるようになるという考え方です。

今の日本社会では生身の人間の価値をdissectして、何かの尺度で単純化して評価することこそが進歩的で、古い因習を①ダハするために必要とする論が［イ］しています。人を順位付けし、負けたくないのなら少しでも上を目指せ、評価されないやつは役立たずだ、というようなメッセージが世に溢れています。そういった評価をぶら下げた競争が、ある種の進歩や発展を加速している側面があるのは確かだとは思いますが、その根拠となっている評価基準を絶対視して良いのかと言えば、それは明らかに、否、です。

少し前にある政治家が「ＬＧＢＴは生産性がない」という発言をして批判を②アびましたが、結婚というものを要素に分解し、子孫を残すという項目で評価するなら、ＬＧＢＴはそう評価されることになるのでしょう。しかし、誰かが人としてこの世界で幸福に生きていくための選択を、そんなたった一つのＢ狭量な尺度で切り捨てて良いはずもありません。人間を測る尺度は、実際には無限のものがあり、試験の点数も、ノルマの達成度も、学歴も、家柄も、社会的地位も、無数にある指標の一つに過ぎません。人間のような複雑な存在を単純な数字として指標化することなどできないことですし、本来すべきことでもないのでしょう。【Ⅰ】

しかし、こういった理念的な正しさ、まっとうさは理解した上で、では点数化なしでいったい誰を合格させれば、誰を採用すればいいのでしょう？　複雑な対象を客観データ以外のもので選抜する際に、この世で一番多く用いられるのが、いわゆる権力者や有力者あるいは専門家と言われるような人たちの主観的な判断です。こういった誰にも確かにわからないものを「総合的に評価」できる権利こそが権力の源泉の一つです。だからいつの世でも、権力者や有力者にすり寄っておくことは、何かの際に自分の評価を上げるための、卑しいが有力な手段で、それはしばしば不正や腐敗の③オンショウとなっています。【Ⅱ】

近年増えているＡＯ入試の類であれば、提出された選考書類の点数化と複数の教員による主観的な判断の総和のような形で合格者が決まることが多いように思いますが、主

国語　（その七）

観的な要素を入れた入試がより一般化されれば、必ずそれを利用しようとする人たちが現れることになるでしょう。受験戦争が厳しい韓国では、政治家がＡＯ入試を使って自分の子供を有名大学に不正に入学させた疑惑が以前に報道されましたが、我が国でも私立大学では、政治家や金持ちの子弟が系列の幼稚園から入ってくる有名校があることは良く知られた事実です。「総合的な評価」という根拠の定かでない事由が正当化されれば、力を持った人たちがそれを利用できるようになり、不正が起こってしまう。それは歴史にⓐカンがみても、世界中のどんな社会を見ても、避けようのない事態のように思われます。権力は必ず腐敗するのです。【Ⅲ】

ゆえに、そのような「主観」による選択を避け、ある種の透明性と公正さを持って、「人を選抜する」という難題と向き合うためには、やはり何かの客観的な数字に基づいて人間に順位をつけなければならなくなります。ラーメンの順位付けだって難しいのですから、ⓒ人につける順位は誰もが納得できるものになることなど永遠にないでしょう。しかし、それはある種の必要悪と考えるしかありません。だから「俺たちはラーメンじゃない！」という叫びは至極まっとうなものですが、その不毛性や不条理さを拒否することが、より良い世界につながるかと言えば、残念ながらそれも疑わしいのです。【Ⅳ】

たとえそれが「不毛なゲーム」だったとしても、誰もがゲームに参加できて自分の努力でスコアを上げることができる制度があるということは、やはり大切なことです。また、そうやって何かの目標に対してきちんと努力して取り組める姿勢というのは、人の評価として実際重要な指標の一つです。その姿勢は何かを作り上げたり、発展させていく時に必要不可欠なものだからです。【Ⅴ】

人が人を評価する、人が人を選抜する。本来、そんなことはできないのでしょう。しかし、それが必要な場面はこの世に避けがたく存在しており、この矛盾はどうにもなりません。ただ一方で、私はこんなことも思うのです。もし人の評価に絶対的に正しいものがあったとして、それで何かを判断される世界とは果たしてどんなものになるでしょうか？　「絶対的に正しい」評価ですから、それで低く評価されれば、あなたはもう人間として絶対的に劣っていることの宣告になります。すべての人が「正しく」順位付けされ、その評価で負けたら、上位の人にはもう絶対、頭が上がらない。それは「ちゃんと評価してくれ！」と不満を言っている社会より、ずいぶんと辛い話です。だからそんな「絶対正しい」評価基準などこの世に存在しない方がいい、私はそう思うのです。

ロ　のように聞こえるかもしれませんが、「不毛なゲーム」、「このガリ勉野郎」と言っていられる世の方が、たぶん良い世界……納得するのは少し難しいですが。

（中屋敷均『わからない世界と向き合うために』による）

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

国語　（その八）

問一　傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　傍線部**A**「全体として客観性のある点数で評価できるようになる」とあるが、このような評価を筆者はどのように考えているのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 点数で評価することはよいことではないかもしれないが、必要である場面があり、やむを得ない。

② 複雑な現象を単純な数字で指標化することには無理があるので、絶対に許されることではない。

③ 物事を客観的に点数で評価するだけではなく、そこに主観的な判断を加えることが必要である。

④ 人につけられた順位に誰も納得できないのだから、そんなことは意味がなく、やめるべきである。

⑤ 無数にある尺度の中から最も優れたものを見出（みいだ）して、それによって評価するようにすればよい。

問三　空欄**イ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 切磋琢磨（せっさたくま）　② 付和雷同　③ 跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）

④ 孤軍奮闘　⑤ 七転八倒

問四　傍線部**B**「狭量」とあるが、この言葉の対義語を「量」を用いずに漢字二字で答えなさい。

問五　傍線部**C**「人につける順位は誰もが納得できるものになることなど永遠にないでしょう」とあるが、それはなぜか。その説明を行った次の文の空欄に入れるのに最も適切な部分を、本文中から二十五字以内で抜き出して答えなさい。

［　　］から。

国語（その九）

問六 次の一文を挿入する場所として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

そこに手段があるのに、批判だけして、努力をしないことは、生きる姿勢としてやはりなにか間違っていると言わざるを得ません。

① 【Ⅰ】　② 【Ⅱ】　③ 【Ⅲ】　④ 【Ⅳ】　⑤ 【Ⅴ】

問七 空欄**ロ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 多弁　② 詭弁（きべん）　③ 雄弁　④ 訥弁（とつべん）　⑤ 熱弁

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 目標に対してきちんと努力して取り組む姿勢を持っている人が、「不毛なゲーム」に勝つことができる。

② ＡＯ入試などで行われているように、「総合的な評価」を行うことが、公正な選抜をもたらすことになる。

③ 人間の価値を何かの尺度によって測り単純化して評価することは、社会にとっては何のメリットもない。

④ 複雑な存在を切り刻み、単純化し、解析するという方法は、科学においてのみ有効とされるものである。

⑤ すべての人が「正しく」順位付けされるということは、人間にとって精神的に耐えがたいことである。

国語（その十）

第三問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

人間関係には、摩擦がつきものである。すなわち、生理的に合わなかったり、言葉を間違ったり、相手を傷つけたりする。時には、取り返しのつかない仕方で関係を①ハタンさせてしまうこともある。では、Aつながりがそこに「ある」とは、何を意味するのだろうか。B対面とオンラインを対比して、考えていこう。

他者と向かい合うのは、それなりに大変なことである。他者の視線や言葉を重く感じることもあるし、何よりも生身の人間の存在感がそこにあるからだ。しかも、簡単には逃げられない。オンラインでなら、カメラを切ったり、音量をゼロにしたり、パソコンで別の作業をしたりすることも簡単だが、対面の場合には、そうはいかない。相手の顔を見なかったり、相手の話を無視して別のことをしたりすれば、それは〈私〉と他者の間に緊張関係をもたらす。もちろん、そんなことが許されるくらい親しい間柄は別である。

それに、対面の関係では匿名になることも許されない。〈私〉は、外面的にも内面的にも具体性を持った存在として、他の〈私〉の前に引きずり出されて、その視線に否応なくさらされる。〈私〉は、まごつき、戸惑い、恥ずかしさを覚え、隠れたい気分になることもある。それでも、パソコンやタブレットで行なうように、現実世界の〈私〉を匿名化することはできない。目の前を流れ続けていく状況に、この〈私〉として、耐えなければならないのである。

ところで、有限性は、脆弱性としても捉えられる。〈私〉に弱さや脆さがある、ということは、〈私〉の心には他者の悪意が②シンニュウしてくる脆弱性がある、ということを意味する。それをうまく利用して、いじめてくる他者もいる。逆に、他者の有限性は、〈私〉がその心にc土足で踏み込んでしまうリスクである。〈私〉には思いもよらない仕方で、他者を傷つけてしまうことがあるのだ。つまり、それぞれの〈私〉は深く傷つきうる存在である。つながりをつくっていこうとすれば、そこにD不穏な要素があるのは確かなのだ。

イ、私たちは、なるべく抵抗や摩擦の少ない関係性を構築しようとする。ネガティブなもの、また、ネガティブになりそうなものが、自分の人生に入ってこないように注意するのだ。他者から感じる対面の圧力をなるべく避ける。見誤って心を傷つけないように、他者との距離感をつねに気にかける。顔を見て話すより（注1）アバターと話す方が、〈私〉と他者の間にクッションがあるみたいで何だか心地よく感じられるのも、対

国語（その十一）

面の人間関係に付きまとう負の要素が軽減されているからである。［ロ］、(注2)サイバースペースでも、いじめや嫌がらせが蔓延（はびこ）っているのは、周知の事実であり、現実世界に比べて、そこがより安全な場所だとは言えない。

私の主張は、こうである。すなわち、他者からの直接的な視線を避けすぎると、〈私〉にはどうにもならないものや、〈私〉の自由にはならないものを見失う。実際に会ったら、嫌われるかもしれない。素の自分を見せたら、引かれるかもしれない。サイバースペースは、この不穏な予感をうまくかわす可能性を与えるだろう。他者との関係がなめらかになるように、〈私〉をデザインすればよいし、うまくいかなければ、そこから離脱することも難しくないからである。端的に言えば、電源を落とせばよい。

〈私〉と他者のつながりの確からしさは――〈私〉の実在性と同じように――その関係性がもたらす、自分にはどうにもならないものに支えられている。私はそう考える。たとえば、つながりをつくっていく際に直面するネガティブな要素はその典型であり、そういう面倒なものを避け続けるなら、いつまでもつながりを感じることはできない。

つまり、現実世界でもサイバースペースでも、人間の摩擦とそれを修復しようとする努力の中に、その関係性の深いリアリティが成立する、ということだ。〈私〉という存在の出発点は「弱さ」と「脆さ」であり、そして、他者とのつながりは、突き詰めると、自分ではコントロールできない「どうしようもなさ」から始まる。それを引き受け、受け止めることが関係性の起点になるのだ。

もちろん、ここにはネガティブなものだけではなく、ポジティブなものも含まれている。たとえば、二人が共有する思い出や乗り越えてきた困難、また、関係性が一定の期間持続しているという事実などである。親と口論して仲直りしたこと、先輩と夜の海を見ながら朝までビールを飲んだこと、十年ぶりに息子と冷たい川に入って笑ったこと、腐れ縁の友人がなんだかんだずっとそばにいてくれること――関係性への努力や記憶の持続を〈私〉が勝手に操作することはできない。〈私〉の意志に手向かうからこそ、そこに実在の感触が残るのである。

ネガティブなものだけに注目するのは、私の本意ではないので、ポジティブなものにも注意を促したわけだが、おそらく、ネガティブなものを失えば、その分だけポジティブなものも失われていくはずだ。これはちょうど、もう二度と傷つきたくなくて、かなしみを避けていたら、いつの間にか、心がよろこびをも感じなくなるのと同型である。象徴的には、人間の感情をキャラクター化した映画『インサイド・ヘッド』で、ヨロコビとカナシミが同時にいなくなることだ。そして、じつはカナシミが記憶の実在に深く

国語（その十二）

関与している、ということも③シサ的である。ネガティブなものにしかできないこと、換言すれば、［　甲　］。

人間であれば、誰しも嫌なことや面倒なことは避けたい。不快なものを遠ざけようとする衝迫は、すべての生き物が共有する本能的な欲求である、とさえ言えるのかもしれない。ところが、〈私〉と他者の間に生じる人間関係上の抵抗や摩擦を④ケイエンしすぎると、今度は、他者とのつながりをうまく感じられなくなる。〈私〉の思い通りになる他者は、すでに他者とは言えないからだ。〈私〉は〈私〉ではないものとの関係の中で規定されるのだから、他者が他者でなくなるとき、〈私〉も〈私〉であることを保てなくなるだろう。当然、そこに生じる関係性も曖昧なものとならざるをえない。

（岩内章太郎『〈私〉を取り戻す哲学』による）

（注1）アバター ―― インターネットのコミュニティなどで、利用者自身の表象として使われる図像。

（注2）サイバースペース ―― コンピュータやコンピュータ・ネットワーク上において電子的に作られた仮想的な空間。

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部A「つながりがそこに『ある』」とあるが、このように思えるためには何が必要だと筆者は考えているのか。本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

国語（その十三）

問三 傍線部**B**「対面とオンラインを対比して、考えていこう」とあるが、対面とオンラインにはどのような違いがあるのか。その説明として最も適切なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 対面は他者との関係を上手く築くことができないが、オンラインは他者との関係を円滑に築くことができる。

② 対面は他者を自分からどうすることもできないが、オンラインは他者を自分の思い通りにすることができる。

③ 対面はさまざまな人間関係のトラブルを抱えているが、オンラインはいじめや嫌がらせが起こることがない。

④ 対面は他者から簡単に逃げることが難しいが、オンラインは電源を落とすことによって逃げることができる。

⑤ 対面はまごついたり、戸惑ったり、恥ずかしかったりするが、オンラインは本来の自分をさらけ出しやすい。

問四 傍線部**C**「土足で踏み込んでしまう」とあるが、この意味として最も適切なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 無造作に立ち入ってしまう　② 不本意に立ち入ってしまう
③ 無遠慮に立ち入ってしまう　④ 非常識に立ち入ってしまう
⑤ 不注意に立ち入ってしまう

問五 傍線部**D**「不穏」とあるが、この言葉の類義語になるように、次の空欄にひらがな二字を書きなさい。

□臭い

国語（その十四）

問六 空欄**イ**、**ロ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

① ただし　② さらに　③ むしろ　④ だから　⑤ なぜなら

問七 空欄**甲**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① ネガティブとポジティブは結局同じものである
② ネガティブが果たすポジティブな役割があるのだ
③ ネガティブの中にポジティブな面を見つけなくてはならない
④ ネガティブを淘汰（とうた）することでポジティブが生きてくる
⑤ ネガティブとポジティブは相乗効果を生むことができる

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 〈私〉が〈私〉であるためには、〈私〉の思い通りにならない他者と関係を築かなくてはならない。
② 他の生きものとは違い人間は、不快なものや嫌なものに本能的に接近し自己を保持しようとする。
③ ネガティブな記憶を〈私〉の意志でつくり変えることにより、〈私〉の実在性を得ることができる。
④ サイバースペースでアバターと話すことは、心地よいかもしれないが、現実感に欠けるものがある。
⑤ お互いに自分の良いところを見せあって付き合った方が、ポジティブな関係を築くことができる。